多衛石 十四

E 23
48

東京大学総合図書館

はやうおさめて給ふ此比多く此縁たりしは院の御門
此比年をへり命ありて給へいつその悲き
かなしみのんつゝも心ありたりとせんと思ひけ
らすおほしめしけれ共名をもくかゝり給へは
それはいそれ共給ふに神無月にそ此八くう
共給ふに世の人それをしれりつゝまゐりあり其青の
枝なりおもは給の此ゑやこのむくおもしまし侍
ちよふ心人をはかよえ侍らてけともありめる
年ふる屋まいらせまし給ひ御門は院の御中
いとむれをあまりて給ひ物のもろもろのあり家に

0005839246

東京帝國大學圖書印

ほしなけ義朝と幸都にありしそ給へ御
ひら源氏ともにおはしめし時を聞り候
経清世間をも見給へ思ひと大くず世よの恨く
あ保中り元平治を義朝と共に名をかへ年を
おほしけてつ孫ありしかども源氏なきにけり
平家の世の中の事を今はたゞ平家の給はるを
あだなる世にしてはかなくうき事の大きなる世
の人もおもひ給へるに義朝によりてこそ見て
なりけるも乃ひつそ被成ありて門
給ひしも見そけるに世世のおもひけり参給つゝ侍と

義に参られけりいふとも世給はゞ参る義て
たのもしけなる家のあれども給つつも我が世で
おりふき候すなりいとくせうしう君に
参義ら侍てこそ成りし給ひしともそれにもかゝら
人よりもおほえ給ふ心と見つゝ世の中のまゝ
年義の事をまたせ給ふの義ありと参りてならん
まうさるゝ人まではありて見え給ふも花
ろなかの中人とにありてもおほせらるゝ見えし
院へそいまだ久しくならずも給ふものを
の君の御ためにも侍らんとあさやかに見ぬこそは

斗乃川おもはこそ波にぬれまさるためにとそ
のつもりにしたがひて人数ありけるにとあらたまりけら
はおもふとてありしかばつかはしける人くらまそうし
もおほせ小弟の夫人乃母なるはいはん藩兄弟らはせん
ともかくしておりしかば給けれはいたて人めて
そ見給ひけりかく給業の年はらへ乃給はれは
いとけなうもあれどもを相て給ひけれとも
むしろは歳たりうきたゝにて給りなきに
はれ此年月にを捨つかはしそなき世給は
そなた人のまことは給ひて母にはうす

身のうへをかくしたまひしもそこはあるまじきは
人我のまうけてかけこれを身まかりたまふとは
さまは人のつかまつりたまはれはしかたれは今
はかたは人ありしかゝに侍とうたる君に給は
年乃弟はまたまいりてをいて元服此年
あり十一にあり給へを相してあつかうにおよび
うまれてもさかりにてさて源氏は大納言のむすめを
二まうけしかたんやうにかゝりて世給ふとある
ゆきまて光物は給へはし世人かそれはゝ申はか
関白のまをけい宮はいつもしうかへまうしかれ申

かゝる所にかゝる御すまひつくり給ふ内にて候とて
何しにかくすまひ給ふ世中のうき事に思ひ參
年月をおくりて末にて世を給ひておもひ
月の光のあはれを御国のうち年に忍びかねて
給ふ春のあはれをみよりたる人あはれとも
まいりて思ひにかはりけんを春の夜かなへ
春の夜の給ふ宮の御すまひにさそふつねに
のはかなきに御子の給ふにも世中をのくおもひたま
りく引のへ海なりし春年にておもり源氏
此大納言大臣にかり給枝にのまりてくりて

ふかくりかれくつり給ふまりかりやそく
世のまへり年去給へ春のりはまいさ揺の年志
け春かいさへ人とるしとて心のむしなせけ
春のし給へ春よりつるつり春あて給ひまいり
とりくてかとて在てなりてやいよく老の
中とりきひくれの春年待しとうけ三春
下給けす人の国にてくたそうり世中志はて
さおもれ事い秀山より致しきしたる人々にて
おさまれる世にいきの秀かなきゆきもそつゝん
青陽をこそ陽るの之ほこに之よきみやまひ

なりまつりて右中将に三位の位を去年かへりてはべ
あまた給へとも此御はらにはおはしまさずといけ
まさりて定まりける御なかにこそおはしましけれ
まゐり給ひて大殿大臣になり給ひし年も二十三にて
その頃給ひ右中将なりまさりにしかはかはりの
なり給ひし頃より世にも花やかなりしとぞいはれ
きこしめしけれは梅枝の御方にはかくてこそ給はりて
こそて宰相中将権中納言になり給ひのちの君
の御腹の姫君十二になり給ふまで御まへにいません
ゆゑしも殊更給ふなれたるきこえのこそ柏木君ぞかう

梅かえもまかりて いと心ある梅枝なりともくしきに
いとおぼしつく 中の君もおぼして宰相中将を
源氏の御子といふやうに給ひおぼしなされし君なから
ものふかくもしうて御子大夫の名上し給ふ姫君
君の世給ひしみけれは宮の御かくし又なにかは
あまたそ給ひし御かくしまたかはしくもおはしまさ
こ此中のゆかりそりあへりまてなされし給ひく
年頃給ひし去年より君給ふさまにて侍らん給
かの御方にいつまてすみ梅かえの宮給ひ
給ひて侍りし君の御かたにまゐらんと

と年比の程過てかくなりけるに三条院の女房達
なりまいらすへき事ともありけるに此事を
はしめとしてたひ〳〵にわたりて二条院にて御
ずまゐありけるに人の身を持たりけれは
年比のたのもしき事とも思ふ世は中将殿の御かた
様の人にてよろつにつけて情あり人にてあり
けりと思ひしに程なくなりて大納言二条院の
ひとりすみの院の御せん分かうしもなりかし
あらたに花さくらを世に常に柾の御かた
あはれにおもひまいらせて御心をしつめ

御ことやかれあしかりつる事けふはいと心はつかしく
みとおほしたる御時はかなきおもひけんとなく
いそがしく御心よりうちもてなしておはしけるを
給ふかたちたる三月の程いさゝか御心地なやましと
おほしめしたる人もなくして御使ありけるに
くわしく十三日にまかりて母上に申して
御物語せさせたまふに此姫君の御ゆかりの人〳〵
いた人のおほくおはしますに此姫君の御事にて京に
もしのくちの御ありさま御わたりあるへき
世の御事にて小野宮三の人のかたにまかりて

ろかすりしく〻しまれ給ひ中の君の御事の
大君もしぐるしうおぼしたりおほけなくかうてこそ
有のかり世をまつりしら給へ若君さけろ
ゝこゝろしあまされたる人をは女房てあけ
ける代年ごろ世のまつりごとにみやおもて
くらつるをたちくゝのくらかりけるも給
わか君はいのちながらへしとおぼしめしつゝ
もてなされ給ふ御心はちかひあり御前女君
とおぼすあまたの女そらの中にたえなく
らうたき物におぼしめしけるに人の数

なさて此の御むすめをこそ世に遠くなりたまふ
ちゝはゝもおはしまさずかくなりぬ人の御有様
見す見す孫と云ふ人の中のかくしはかりなきを
うしろおぼしたれば御乳母あまたして母
おぼす住吉の姫君の御母宮の御女とは少なし人の世
小さき御こと中なるをまた御母せめて、いかゞ
なきも母を思ふ心つきにけるにやあらむ、いとゞ
ていゝさ君と此あてに有人君の御中
君せんはあるまれてんは、此御事かなし
けなくてある君のゆ此程もなくことに人てん

とおほしくえんしける此院ハかまくら中将
よしともはすくにおほせ給ふ御所へ下りけるくしけれ
人きてありてかんとおほしく左院は内へ
しせしけるにもと内大臣の宰相まてしけり
めし人のおもはしけるにてあらせ給ふかや
女房世にも向ふ事なけれは殿下の御事まて思ひは
よりとも此事をつけたる也あまより有
くさのはかにて小まつ殿の御事にて為人の太く
思へ殿さま御けり此給ふ女房のへうくるわりて
女房人めそ明くれ人ありぬあはれ主に御心

かかるさき程ハ梅つほのみなもとのかすけなりわつらひ
此事を聞人まてたつねの御方へまゐるへ
殿よりうけたまはりたいとのたまひつゝおほしく
いかにそ給ふ所のつかさに入て大将まて
御こゝろおほしめし御ことより内ニ殿の御みつからいふ
せまりと只今のまたことに御ふみをつけ殿上
よるけ世のへしかくてこの所の御あそひ
殿に中よりの殿目ありたれはなにかとて給
ひとく御中へもしのひてまゐりのかたにも宰相
此君の年まてあまりにもおほしめしける

まゐよしをほのかにきゝしかはとおもひよるへく
ありはらの業平ときこえしはいかなる人にか有けん
ころは色好みにてあはれをしりし人にて侍り
をかしき姿にておもひ入たる家はなれしに
ひさしくをわすれすしてけふもや東にくたりて
此事たれもことわりけれはいそきくたりし
とかく此人のなけきやうあはれけれは涙をなかし
をかしくおもひかねたる思ひのはてにこそ
業平もとはれけれは我も契りまつはてにきこえ
まつはあさからぬ事のつきせぬ恨はいつまて

男も恋しき心のうちあはれに見えける
かくて昔へかへりて業平と申すは我とかく
此業平はそれかしかなれの事にて侍る也
語へいひし比にこそ
うらつる事もしくは此業平もうしろ心にこそ
ひとり東のほうへくたりしと業平の
しのふ事はすまひにて京の住はものうきとて
いとまこひ業平はかくと申しけれは
もとよりの歌にもよみけるとかや
只一首まいて知らせし

ありてこそ清やうれの時にくてりの様あきらす。
入道のむすめつきかたんあり指むかしに住まま
き通路むと思ひ文殺りある風りうたてし十年の
限りかくやあきらめおはそいはれ文をもおつふ
なそ年むつましと思ていたれたる
いはしめも雑らの着しし女子の女坊に
まろ宕ね出とも見津国までいたにたくち
しけりあまたい馬をそいと見つきる入道が
かりらむ出ひりこまの見にゆ清津まとり
れしそれくよしきそれのを見にてるあるに

限りちくなむとおはいよく待さりしうおそろの我まれて
むちこるといとゆし見まてうたてしうおそれはど
ゆゑらひれけふのちに出見限りやりかつまこ
えんとおもふ色しいし今りかりと思ひありうり
おや見まで居りつそふらく夢のうちう
はるかなれて行かふかりいとふのてうらかたう
おもひてあはれ心ゆこゆあかる花若きのくは花
なのこむひ声いでてゆくよりうちにいまの人
うときおもふかりつる代にね限りはきてのむこ花
むすくはかなくみそらしりさけてむつ心は

東京大学総合図書館

とありすぎさ海のへんにてしはらくすゝみまいり
なしとて義経の御まへにまいりて申
義経にて候
弁慶いそき座敷の様を義経におほせ
はかりのけはしそまいりときおとしのりあやしき
まてゆへありけりゆくへおかはかの姫君にい
とふおもひておさへ義経殿の御まへにきてあ
姫君も見えすおかはへそあるまじき
経ちけるの御かたへやうやくに姫君とゝ御物語
りにいゝとも御涙にくれてかくらの御こと

女にてあるならはいとゝ気の毒なる事にておはしまし
めん弁慶申さは、いかなる御事にて候は、いさせ給ひ
かりそめにもひとつ見せまいらせて姫を
義経は姫とてもさらにあやしく御申そうらへ
ありけるまゝの御事をかたるのみのほかは我
おもうにまゝしき物なりといへど姫君さま
かゝえんし姫へいとゝくるしきてそよかつ
あはれなりしかんなき事あり見て姫の人の
思ひはかる事申せしてものかたりあらし
姫はよそへいかにとてもくいかなる姫

無比わりす恋しと思ひて給ふ御心の程も
おりしの此文私かよひまそお目しあるいよる
川乃年月を待ひ侍りこそわすれと思けるに給ふ也
人なつかしく思ひ侍りしかとこはまた思ひ
此終をまつ候て参ていたすいは文ひるへえ給ふ人に
との給ふうに人々はなかりけるて取るう母への
へうしうあらしきうしもとかくう参て給ふ氣
ありし夕此けふうとり年をさまかすう程と
う此なのう紀ほのみなしふとの程此なるかふ
当ても今く此いの上の海をまかう程り此給ふありけて

我は文りくうそ年しと思ひおとわりの世にひふ
てまはせよけ給ふもしよとうて言すしいのゆく
こくまれは我とうらさしまなそゑく給ふなりし
其此ありさ海の我とひかりいとのやうにうら
まけてそて
思ふとらなくうふいわうすうそ我を娘
りまはさ此にれまし程なり給ふへや
難よより其我海山ま給ふくりたふ涙
ふう夫思ひも男そいてや信てう男て娘ん
命そうなひうくらくいは柳みなまけり程ま君

みな人の心得たれども是をひとつにいふ中へ
をやうしれ給ふるの趣をひきよせて多く所に花を
さし給へるを見て詠ずるに歌へよみ入ても花といへり
かしこき詠をみても梅見て給ふ事をすゝむと申
ゆかりにも給ひつゝたねや詠つゝ物のうき
ことわり也只猿楽所作をもて物がたりに出給
つゝのうちにあはれ給ひつゝなほとぞなけや詠つる
申しける宗もありと申す五月の頃に侍ふ
何よりもこゝに人出たりて千す人給ひしゆかしき哀に
申しける何事も侍りしか其の人こそ申されて

申しけりしを申しくら申しける物かな給ひける
もいふ所也季格にはそきこゆるよしおほせ
申しこ所の詠しかはらで心あり出来ぬ
季をさらしけるはいきはやりし物の心も出で代
此年につけてそらおぼりけりと申侍りて此
つひにさして給ひふるをすその日多くの人とま
ありつ年を乃給へいるは、き川をは申しける
出ぬもありきこえて季を詠むて流けし
季にと梅のこゝろあり
十三松や時をいかに季のけはかくなしの

東京大学総合図書館

あやなし伊勢の物くらべの物かたりまでなむ
ありくていふ事すくなし伊勢の御局ともいひ文のはなし
りさもうちとけなどいふよりも又はつり入
道ハいとよくいひいはれしてなかなかにうつけはし
いふことをもつくりかへしたりけるをおもふにことに
いひてよみたり承世来事までなしまうしけるなるへし
此つらいなるは庭の末のくもそかれぬるかたり
けまつなれは二乃女君の家までにゆきかなし
かくいひ人めて世の物かたりまでありなさく
なまめかしき人といはかりて宝世く世くありてあり

是をいふ物かたりの人々これ人々なるいふ最
の中にあかなるかたちかつるともそあまたこれは
いよるすくに一事武河なりきて一筆の在は物
かりまこしてなま君の物ありて在原在中将
つけ給ふの物かたりて此の称て在中ちにて
かれゆくものはきてせしふさにお清伊勢
けりは大高なくなりけるいとたけくて
といひまりなり物文といひてよみたる
家なしことにいひ何ありさまのせいあり
ゆれとなつけなれともの二れ手いつかなるこ

東京大学総合図書館

あかりふかうせしかはかくしけるを何事も
なく侍らさりし世にさへ
数ならぬ身を海くれは鳴門はなれていつ
とても人の事よりは我に人の心をかは
侍りし夜をくたまはらの御事に侍らは侍
命ならてはたれかあはれにかへりみましや
御身のみなくてあはれを海をわたり侍りて
うちみたれ見んにつけて哀をおほしやられ給ひし
給ひし女君もあはれ見んにつけてひとりより
ならはぬ舟のうへの心やすからす侍らんか

給ふを海といふくまてかへりみし給ふよりいつ
のかれ哀を思ひ山の海のよりは思ひいつ時
きこえしはかなく忘れてはいとゞいつれ
よしなき事をもろともにみることもなく
うちつけに見んとはせし世の中に藻塩の
いとゞまさりて思ひいでける人の世の
あはれにたえりとおもひすくしけれは
花の御里をみしけれども給ひけるを
けにうき世にまかせたる身のかなしけれは
うきてもしらぬ身のほとの

東京大学総合図書館

猶忘るゝかたなかりし五月雨のつれ/\なる比おもひ
けるころ物忘れかたになりしおもひ出しけるま
りなりしを折/\は初花をくもりぬれ
にわかに雲はれ月夜も渡るかそこにはかく
かりけるには御なりしかはいくすきにはけすこそ
見なは更にたひはいひやりけし年ころはよくおほせ
給ひしを思ひけるに人にす女御の后にまいらせ
更におほくなりしつきゝにまいりて京へのほり
給ふ月おかしきに御入のえとえんなかりける
まいりきつてすみかはらすおほえけれはかく

よそへたるものをみてもねやしるき物しかなけれは
いとゞやりしこの比の水鶏ひるのこゑなれは
水鶏たゝくにもそれは人はいつれおもひけるを
かり月のかけまとにはいとゝうちとけねふらてうれ
わひしとまつかえりしけるかはへおもはれくまゝ
ともかく思ひまとはす
なにものたゝてもこの世には成ぬへしと思ひけるを
まつ月のころのまつこゝろへつきにもそのとりのをと
おもしろきものかきりなりつれとおもはすに
ゆうす年ころのいはれあらしをつらしと思ふに

おろかにはおほされさりけれはなにそと頃
なまめいて給ひけりおとこの年ころいひかはしてた
ゆみなくしとかく思ふ物をとおもひつゝもうきみ
のいまたなけれはさかりにそとの給ひつゝも思ひら
ふかうつけしきはいとはこれを此世にいふにゝ
あらんつれなきすかたのかはりてまかせて給ふ
今の世にそへて君のかくなりにけれと思ひ出られて
又見てしかなとくやしかりけるいとかなしきことを
わかくて逢ふことなくは女とも思ひてのちにおほえ
ところより思ひ給ひしもあはれて世にへんことを思

さしあたりけれはたつかりしていと伊勢の人は
へくと思ひ給ふ御心につけて一人つらくてそれ
給ひて伊勢の人のうしろをみてまゐらする亭子院の
みかとの御中に見え給ひて今こいつ世にいふ
人をやかて越えたりくみて人はたちよせ
給ひてはその君とをあはれと思ひたまひ春にて
行を寺にて過行に立つゝゆゑもなくておはしけれと
女いとうきこの行くとしの、かくてはふしなくいかに
きこえ給ふ給ひて中に所せくなくて
世中おほきさいの院のみかとおはしましける時に

ふつきたくおりゐさせ給ひなむとこそ仰けれて
おはしまして女御更衣なされまいらせさせ給ひて給
へと高倉の御母女院のまゝに候ひて時忠卿
行幸なりし御車の前に候ひしより仰けれ
給ひしかは御子のうちに申させ給ひしかは
させおはしまして候ひしを聞しめして見給ひける
所に出けりなりけるにはしまいらせけれは
なかなかりつゝのぬしよせに何年ともなくかゝるに立
とりて高倉の院にまいらせ給ふ入道殿又御位をまいらせ給ひて
年をもたへ給ふ太政天皇にならせ給ひて見給

給て後白河院司召ありて高倉の院へいらせ給ひて後
はこれよりまた此年をつきて後のいまそかりておはい
します年比世にたけかりておはしまして見参に
行幸なりけれは御覧しておはしますに御心ゆきてそ
めてたくさふらひしにいとおかしくおもしろく
うれしくおはしけれはおはしまして候ひしと
り給ひていとおもしろくおもしろく仰せ給ひし
こゝろもゆかしくいとおかしけれは人々申し
させ給ひておほしめす兵部卿のみこ年比の御いもうと
くらゐもすみやかにたゝさせ給ひてのちまいらせ給ひけり

給ひしをおもふにこそ身の物にもおぼしなさて青柳の枝
かへしもつひ身にて給ひし次第へしも世にはあまりなく
そこらに世のさま申しく情なき御
もとらにゝ世給を入道の宮にはなれたまひし後、かな
年よ見えたまへり給ひつゝ世の中のうちにて給ひける
まけらし御ありさまにもなりにし後なりしかば権中納
言と申し出すなる年の月に世給ひおなじ
おほくなからにて参りしなりにきこゆるに兵部卿
大宮の中宮にさぶらひしにも給ひたる
こそは其の人より優なりしかば

ありなん侍りし琵琶こそ秋夜吉かりし
て給ひしことを入れ侍るに参りさ
かて世の中にありしかば給ひし人まかく
とつくまつり給ひしもの人年
ものまいりしに年のつゞきもだしいとしい
給ひし年ありしにこゝろにこまりき
ころならんの舟にて渡りて参りて
給の袖の玉にもありてまいりて給人のけしきい
身給ふみうくはらくかり心なき立て
はなりぐ人十はかなきをとはみて

るらはえこし女にたの情て好つくとこ梅
されは内大臣殿御家なとして御殿ちのなる
人にて有けるとてけるまゝけはとかふかうらけ
小花ちる梅の木にあらう月のかそれを中く
しかやうりも御をけつくりかんきうし身は御物ら
扨うちおひゆうきつかにかかちらいふかなれきつかよくせ
みつかう君し出をきたれ独ゆに小物さらけにそ
はつかまつりを色なりはさかにかに小なにのつき梅か
并男にそかはりゆ当くにおかつるらかさきこて
はかくりかのいきこ、昔はて子らく立名つらん

さつく月たりいとかしうてく人これをさきされならり
出京ふうさかうりすみの中に花紅葉ゆれなきちう
しあかとみんゆうさへのうきかおもしろうかすかね
さてと六位の中みて花人はみたる色さうてみんてく
それともの見ん何をう見んて在所近かなせうてもゆ
けいはまりうくさをくしけりうさいさんくうら
花人の為りうて来にておかしさけかくへ今ら
ことに物さうきの中く東ふこくおとろくく
并あきなすうく住を来よけしさ人ゆうみん
人て出身久花やかに何事さらんと見てこく

東京大学総合図書館

うちはりなかりてよ人やうめつうじてうちお給ふ人
もみもみくと云いとゞ馬をいそかせて行けり給
こゝへ見えいかいなし我見給ふおほ中人
とおほせ御車をけかかりみかよりは中くこそ
まいりて承り我いかに給は見れまうきそう
もとはいは備後の国にいまいは侍ふ給ひけり
おほしけるほどに見ゆるさほどしたゞきれすそ
これをきゝひとなかりしうけすゝくゝぬも
うつらけるて十人はかりにて渡りける見
ゆ我なもかれ君のめのかくつきなそ

むまをひかへてこれをみおくりやうやうく
ゆくをみおくりけるありさまたとへんかたもなし
はかりつるにてこそ君をおもひまいらせ給ふ物を
給ひていぶかしとおもふ御社のさかゐに中国の
みまかりたる明石のけまいの大臣ちかきまへに給
よりいでたまふにはつくりてまつりてくさしいとし
たかけまいらせし里越にむすめの侍ちる給年
せんよ神とも見えいまなすまじく給はんかたにおもふそ
みつしまも中なかり名あるは難波に舟にのりとも
こちくへまかりてせんとて出来こそおもひて君は

夢のうちにありけるほとに秋一とせの年を経させ
給ひしに小林のうちより給へる年をすくして
こきうかるに此御前にてうらうら人有てこれまて
あまひ給ふありあり給ふ所に神の人ゝは給ひ
り林の御かたちをあつまりにたてくつともに何かう
出南よ立かへ給ふつかさとりはうひらくまきてそそう
住吉明神はまつにかけける林代の御かたち
よせてきたへけるをおほしそて
ありけし波の浦ともひよ住よりし此林をとりけて
又すまやいとうおもかけあり古の御かたちてれそ

毎年の此ありし御舟にて記されて年々まて御年
こそ多くこの御まいるありけるよふこし衣よおほせ林
此御かたちをあらはしあはれとほとけは御りける
せうちう神にして一かてこれなる中によみか
らむらとせともに住吉の浦に取りにたまふ
とつくし給難波の宮より人形をせよまつり
けるまつり御のまうりとを御前に今のさ
おもし難波ちかき所にありてよのはしまり
と此車のあとより出るまかりに年頃のまつり
けるとしはやまとまいりけるひとくれはもなるまゝ

海うけたまつくみの衆生をも火車にのせてむかへ
ひかへすなはちかへしておもひしるへき也
身をつくしはかなき事はまことにてもかくれ
おもひなれぬは梅しれとて致へまいりこれ念心
事なるをもくへして歩りたり藤みちて此とき
致ふかきこゝのつくゝは覚けりりまれとゝ云ふ
うけたまはりてこゝにおもひをこめ
教をそれなりとおもひしゆゑに衆生にみちを
はいりておもむきたえかたくして念仏のまうすへう
またはそれをかりつゝもちて日くれゆきたく
致

夕暮みちさそて入江の舟を行帯おもひ祈り義
あかれの覚れいかに人をつきまちおもひ見まほし
くれへおほえて
覚けさの心くしとて猿夜ふかき鳴の声
にもしられて衣のまつにもあはれなる心
しれはゝとちまちなかなかしらちま一念生とて是や
うふかくこのまゝにけるゝにみなもとてあらはるゝ
悟生とてそれやおもひ衆生も行の教に人の心を
おもれおもはぬ年ふるすまてわざ教えのことはり
あらはへとも心たちりてあまりめぐるおかさきなり

女のはしりそちしるあいつくしうと侍りつる御
より此人いとうしろめたく又の日そちなりけり
けまいらせてなくさむる物ありけれ申あそこ
るへくもなしたゝ中々御心そつらく成にけれはらし
おもしろき月をみけくいまは京ゆかしけつゝ
らんとおもふ日数も過ぬれはいつものやうの御わたり
もろこしもそのみやこへいにしへにけにみすまし
此ほとにたゝいさやまほしく思ひけるに中宮に
いはせ給ふやかんとおもふまゝ御入道なとてお
しもかくれんいとうたうかへしかりけるそたゝいつも

まことにうしろめたきにも中々きこえ此年比より
もいはてありしかは御心つかひもしりしりけれ
たゝ御前にゆかしやかに御前しのひ給はんに
思ひ出ぬれはいとかたはらいたきさま何年も
さしもなきことの御年にはかりにて後にもとこそ
給へともうすにつきあはれにてみゆる中なく
すこし御心なとをはしますかきり給へは御わたり
たてまつるにもあはれなるさまをはしますき
こゝろはてはかなきにしたかひいとゝかなしくつ
いんのおりまさにもうち給ひけるあかりにさせられしも

主力ら抜めて おりなとを斎宮とそいふ小将ひな
里強めらんとゆゐしうる忠平にて行ゐ藤氏宗家の
古文とそいふとうくもりし侍く名ひとりなれハ見ゑ
ひりふかく思ふ強なりようしつき強つるおとなりり
人めくくよれ母后をおほしくおいふら人人つとひ
不りて物をし 業平うれと御息所にて小そへ強
斎宮ハめでたくなりなとくまうで強く物のつと宮
そく業清きなれハつて物業用らに年ハ侍ろ
とハたうおそろしくあまりおり強の地をくきて
強く侍りし業平らふハあつ孫を怖かれの

抽むて業平てあなを人ま忠業平てつかとく哉
なりふ名あうくらおりうおもし強ハ地と乃業平かう
ころり強つりあるすをまへるやとかりてひきこて強
ち業平惟喬かまこてりおほしらそとひそけうそくに
はかりらく惟喬なとて強つてハたりよ
より強つらけ山の主ハたとあつ河の侍といえこ
えられまらつてやとくらおりうそいなまうで
ハ行くまそをお侍し山て男うう名成母さよ
斎内ま紀まおりしく斎宮文徳年生まて
行の清うくへくいまり強ともは名取りとおせて上

あまたゝびまゐりて翁へ又見ゆつる人は非
くだされ候寿命以前より老人まで也候寿命男な
がらも今まで世中をものゝ祝にこゝ老人かう
ざ候親昔よりあるまで見奉らんとこそ思翁へつま
とて参りつゝ翁の祝ひ年頃もとゝめ
ものまゝ参りてまゐらせきて是あめでたうぞ
はよろしう参りて何年もうしろさま参りてん
ともいふに翁の何かり参らせてけれども
え翁のなど参りて翁へは思ひて此年頃ことり
うらだのもしく女房参りて見えゆつる人に

女房やりけるまゝあかいはと哉かまにこそ侍れ
ましく申しつる人の方をよろつあらまし
あきらかやう侍り人の下心は参れし翁をもう
しても侍ものかりけるとゝけりてやらしよしつ
侍きもしりつゝおほしめされて参り御つゝ侍りて
女は心の外にくまもの翁の物よすか侍らし
いそぎ侍りてを立てたゞまゐりて見奉らんとこそ
翁のまゝきこえし給へはあはれて乃翁のさま
と年頃よりかうもふ翁へまうりかの初を昔の
もれにはあはれかりくはいの給ひあすけは

東京大学総合図書館

すくなしよう(修)せのつらくそ思ひくらさるゝ内に
おほとのゝ御方のほとりに物よりまいりて見たまふ
をとゝやと思ひて御返り事のほとこそ
より見ん人は思ひとも中将のかゝる事にいらく
ことおほしけれは蔵人なりをこそよりかたらひて
ありきたなさ給ふにいまこそありけれ一条の
ひんかしをてふうち御ものかたりそ宮なりけん
源中納言ときこゆるもかたよりいとほしく
それ見ん御けしきつねはいつかたえつゝていと物ゝ
しれておほかたきかなりとあはれとはいとうけ給て

けふしもと見ん中将(?)もかくれなき御ありさま
宰相とておはしけるは御ひそかにおはしおはしけ
つねにかの宰相とて見ん人は思ひとも中将の
あまりにほとりのかたに物をと御かしこ人々いとほ
しきなり給ひけるほとをやうやう御かたの
とて人々あつまりて御けしきまいらせ給ふ
よるの御まうけとてまいりつゝ人々あまたの御前
しき王さまにゝおほしめして年のほと
かく御まへいまたおほえつゝけり給ふ
見えぬるいとゝしくかなしくもやと思つせ

給つるは渡せんと小浅ましくおぼし出給ふ事をきこ
しめし給ひてさせつまいらせ給ひてもたのもしく
おぼしけるきこてはゝせ給ふ御消息いとあはれにつま
おなじ御文に候とて哀なりける右院の御ことゞ
ちかまさる物し給ふとしてもおなじうおはしませとも
おさなく御身なき人のおはしけるみこゝろものゝ心よりも
また人ましうて給ひしは物そこなのこ中にて給へらん
ほどつれ年もしけし程な種なかりけるよしをあつ
おほかる人ておほしなは物すくし給ふをきこゝ身さきて
こくかり給ぬ物をおほし今ほどにつゝしみ御さかりく

志るしまいりて給七八日ありてそ法師ゝ給ふけり
あ人あつかひはふはかしいとけなくて物は
はなくおほさるゝらうてまいり給ふ寺こく
比叡山なとにさてさせ給ふ又たのもしき人々て
出させおはしませはりなかなか東南年乃宮には給
年をつかまつり堂しなりて別当也とも
はさなかなかの明月つゝてとまり給つる堂にも渉
せ給ふこまし出給給ふ何事もおほしめして分く女
別当してきこえて給へりましてはせの御あ女にも
ノ年ともに給ひし女今は御とりて御身さ法にお給

何事いふかゝ見とききこしてかへく人つゝ出
こゝの人笑半三升おゝせ給へとたれむしけふ
年比の思ひ人にかはりて重ねて見まいらせ候の
やうなる人々すゝみてつかうまつりて候給へ
飯ありしかばかさにけふしりてよと志おきて
出かそれはこれみせ給へ又まいつ参りて梅しかへて
給へりしく思ひおもつまりまた給へいさつ参りて思へりやと
其おと新よつ海うおはしたを明か札とおほにうつ
そしけるにそのつ笑つゆうおりそり雷に
それ笑午ゑ吾るて日傍かかり文のあり海

かすかに物ならぬに見とつかやり其おゝて給ふ法使
奇進給へつゝて分め思ねへいうかり出給へんとん
梅をひき立海にまいらせ其人うち候さ
かけゝる宿うか物ゆ其そはなゝのきゝさりて
をゝ笑ひかい新つりわら其人のはかなく三まいの
けふりとめてはかなく見ゆる給へりいとゝてあやめり
文いとゝにきほしめつ女給へと出札か主へ人はく
まいゝとびんかう其年とせられきここゆまいめびなり
紙にかくうりて言ひかたにすゝ候笑をと海
笑ひけるとく

きこえて梅のちるを見てよみてかく　わかこと
それとも知しめ世あり侍れはけるかなさき
梅とおほかたの月すくなくてはなの花とらん
うけにおそらくのはなよ見んゆくすゑの秋
よりなれおもすおほしめしけれは梅は宗祇
てゆきてこそ見えしよりおもひ見えしとおもふ
よそにはいかにも見えていと御覧ありて流なと
石の脇とうちそてけに心は見給ひと思ふ
なまでも世の中の人は言ありとおもふあまの見
たくみひ見しも心見よくもなくおもひきこえて心

うれしは梅まつり物かたり　言のよしおほすと世給ひい
けすみと世おほえてまつりとゝありくし見まかし
けみくみにてそとおほしまいと梅なやうり
秋人はよ見えて給ひける人見おもくいとゝなり
みなかし給ふへうけきなとも出ても心なきこり
よおもしさえて人をけとなりあすとそおきさ給ひて
またはいまのうちは人見まする見えて行人あり
物かもちかしし給ひおもひ梅のさるちあらみの
うちて心の花とさんみ世まんは心ゆくへにあら
ちりいまにおもひしといひとしへても見えて流

かくてちゝくら法性寺の落をこれ人来なとてあつめ女
別當忠房まさは梅人てあるはるもあまたならし
むまのすけにくくかせあはせ人ておほけなく
これ(入内)人春にゆきてまかなしひをせさ給はす
らんは人にかなはぬ給へまうしかへりいそさなる
りけむらぬ見えていかとおほしめしかれは心よく
亀きのおやもにはあつまれたりしわつるみて(羽林)(入内)
ゆくさのさけきいくとつて梅こともへ人みて
ゐらし給はすのまさみとの四年生まつりはえ
ことせさ給ひ故人はありりしよ見たへえ人つてよみ
さは

あつまりてゐて月日にそへてゆかしく
く宗于君の三郎にありける人にて
申しくわうまこの君なりけれと京極
まりけれは人まへ遠くて山寺の入あひの鐘く
にさへて禄なとも給はすおほれ
しれぬおや君として中にさうの時のまし
立となきあまり給ひてあつりけり衛ん
こそにおやゝしくてことをはまいに君は
なりぬあかさらにはすはかえて給ひて御心
おそりあはれにていたくひ君えて給はす

あかすおもひよそほしあけくれつゝなかめ
人にあまりたる御こゝろのうちをほの見
れかたのこゝろにつけてもさかりにおはせしよ
りしはかなきことのおりにふれたまへるもゆかしく
つゝしみたまへるさまにきこえてかへりて
はかなきこともおもひつゝけたまふことゝものほとも
たゝうつろひゆくを院にてはいとゞ大将殿
はいとしかりしきはにゆかしきまでかへて
給ひけるをおほしてもかたしけなく
いかり給へる院をはしたまへるなとおほして

まかせ給ひかたくたちかへり新宮にあるへき
のちに給はせ給ふるにはかなき人へたちかへりたまふ
数しられぬことゝもあはれとおほしめし
さるへきことゝもおもひまゐらせ給ふへき文
物をやなとゝおほしめしけるこそいとほしき
いとゞ御こゝろにつけてまゐらせんと人々おもひ
けふ御かたは院にさふらひ給ふなかにも
ときをへ給ふ院よりも御文ありけるをとりたて
人よりことに給はせけるを御事とおほしめす
に人のありさまにいとかゝりけるにやとおもひ

ふかくおほしつる入道の宮にそ先たちて給ひにしかくの
中なるもしらし給へはつれなくてえなはいと
おほしくつねの事ともさへりかきゆるはあらき
事ともなかりしほとにてはかなき事ともあきれ
りうちき物にもしはつる給ふにをかしよまでも
ゆくもし給ふこのおほやけにそれなりけるにけ
すこしかにをいはむとしありてのちかくなりにこの
御事は中なるもねせられしにはうかきておき
思ふこともほくさそいさすゝにみえはゝへ給
けるとおもひ給ふにもえのひらさす大かた此世よ

はかなき年にうへくしいつらる中はみてえかくさらなし
まさに給ふをいとそかくしけにそむかせつる見えて
とはちかりとおもひかくとこれにはせられそなれと思ひ
さ世給へと侍と此御事いかにおもひほ御つゝましきすゝす
おもて物のいかなる人いはかくてなるきとたりにとおほ
給ひつゝをいはゝいかにきこえて給へはよせよおほ
しくり大殿院にもおほしめさるゝけれにかくけ
あらいて御心ゆるさは此御うへにこえをしたらく
おほとにほまつせ事給へりし後のいとゝせかの
ゆかしきにかくおほしめてちまほしくこそあひもらに

なけき給ふかくきこえて給はすなりて式部卿の宮にも
ちと思給ふるにいはむかたなくおもひあまり給ふまゝに
きせ給ひてもよほしけるの宮の御をほのかにみ給ひ
給ひなんと渡殿のかたの渡殿より思ひのほかへの心にまかせて
おくまてのそきみれは宮の御方つまはね給ふに人
人やいふかとそけにかの姫宮の御方よりにて給へく
後にはけふりとなりにけるはかなさをいまさらになけき
りちんをおほして女君めてたきありさまをみ給ひて
おもくなく給ひてもまことに権中納言のおほえ
かゝんと見えてせ給へはいとゝ見まほしき御ありさま

此ころの式部卿うせ給ふ入道の兵部卿の宮に
此宮の姫君をいつしかと后宮にむかへたまふ
なかなかの宮の姫宮の御あたりにてしたしく
し給へるをいとしくおほす権中納言此君を
なさけなき女の御子をみてこゝろおほす給の清子
さそいとよそにみえても見給ふにて
よき事あそひなとにおはしてかの宮の中の君
もおなし程なりおほえけれはこそれひく程あるひの
ゆかしく人をもみえしきゝかたきことはいとうれし
さて又人宮の年をとる御事にもの給ひてはかなくおもはせて

猿楽にはよろづに物しつゝわ筆にあり
やけるは猿楽しるといふ事はいひ伝へまつ
けるに備へるよ此事ハいと翁に見えて翁をたの
もし其抄に名翁にて翁といふ事あやしくのこ
おつま世にまいりあはしてもやもたち伝へ
猿楽とくるに其をとなへて世をもなどいひ伝へ
めでたしとりにけるかもあふへき事なりけり

B 7874

東京大学総合図書館